２０１４．１１．１

１１月ようちえんだより

西神戸ＹＭＣＡ幼稚園

子どもは親に甘えたい時に、あるがままの姿で十分に甘えることが出来てこそ、その後「～すべき」「～であるべき」といった社会の厳しさを受け入れることが出来るようになります。乳幼児期から、「子どもは甘やかしてはいけない」「～させなければ」という価値観で子育てをしているのであれば、子どもはあるがままの自分を受け入れてもらっているという安心感は持てず、また親の顔色をいつも気にして、親に甘えることが出来なくなっているかも知れません。そんな子どもは、親の望む姿の自分でなければ愛されないという思いにとらわれ、常に不安で何事も親に頼るようになったり、逆に親に反発するようになったりもします。また、十分甘えることが出来ず、またあるがままの自分を表現することが許されずにいた子どもが、親から離れた場面で、例えば幼稚園では先生を独占しようとしたり、子ども同士の場面では乱暴な行動に出たりすることはよくあることです。そしてこれらの行動は、満たされない気持ちを満足させようとする気持ちと、満たされない気持ちのはけ口としての行動であることは明らかです。

「分からない時は、聞けばよい」、「困った時は、助けを求めればよい」、大人から与えられた課題をこなし、評価を受けるという生活が増え、子ども同士が自由に関わる場面がどんどん減ってきている中では、こういった人間に対する基本的な信頼感を持つことも難しくなっています。自分を表現し他者を受け入れる、まさしく遊びの場面を十分に経験することの意味が見失われている時代に現れている課題であるとも言えるでしょう。

常に他者に対して不信感、恐怖感を持っている人は、自分を守るためにも、自らの心を開くことはありませんし、少しの挫折を経験しただけで、自分自身の殻に閉じこもってしまうようになりかねません。「自分は誰の世話にもなっていない」と口にして、自分の世界に閉じこもってしまう「引きこもり」が増加していることも、あるがままの自分を受け入れてもらっているという安心感を持てず、「友だち大好き」と言えるようになる豊かな子どもの時代を経験していない生活に原因があると思います。

子どもにとって、一番うれしい親の姿は、いつも笑顔で接してくれる機嫌の良い親の姿であることは間違いありません。きっとその姿は、子どもがそこにいてくれるだけで、幸せを感じている親の姿でしょう。そして子どもにとっても、あるがままの自分を喜んで受け入れてくれる親の存在が、うれしく幸せであるからこそ、子ども自身も子どもの世界も十分に楽しむことが出来るのです。

子どもと共に、喜びをもって毎日を過ごすことの素晴らしさを感謝して歩みたいと思います。

１１月主題　「ありがとう」

聖　句　“大地は作物を実らせました。”

（詩篇 67：7）